

三 浦 巡 検

福 島 依 子

景勝地に恵まれた三浦半島は、観光地として四季を通じにぎわっている。城ヶ島もポピュラーな遠足地として知られる。そこへ我々二年生一同は元気良く（電車内でのパニックやそのお陰で一行に間に合うと言う遅刻者も出たが）クリノメータを片手に出かけた。バス降車後、予想に反してしっかりと晴れた夏空の下、城ヶ島の地層を浅海先生の指導のもとに確認を進めていく。第一に白色の火炎状の凝灰岩の地層を観察、その後海食台地の露頭（三崎層）を写真等に収めつつ、走向等をクリノメータで計る。（クリノメータに慣れぬ手つきが四苦八苦し、走向・傾斜値をなんとか出す）昼食後、城ヶ島で最も高い所に登り、茂みをかき分け、腐食土が20%以上と言う世界的にも珍しいと言われる黒土を見る。その後徒歩で城ヶ島大橋を渡り半島部に出、三浦半島の“宝庫”たる所以の裏付けがなされていく。まずはじめに波食層を見る。漁業組合の手前では、海に突き出た岩の“漣痕”を見たが、これは神奈川県により天

然記念物に指定されている。“左右非対称の波模様が見事に描き出され、これは第三紀中期、海底に堆積した泥や砂が一定方向の底流で転動していた際、転動部分の表面に生じた小さい渦により主成されたものである（後略）”と説明文に掲示されており、これが地層に残され、変動により海面上に露出し、侵食されて現在に到り、流動漣痕と呼ばれている。またしばらく行くと、同じく天然記念物に指定された三浦市海外町のスランプ構造が観察される。途中で褶曲構造のようにになっている。灰白色のシルト岩と黒色のスコリア質砂岩の有律互層からなり、異常堆積とよばれるもので、シルト岩・砂岩が未固結のコロイド状態の時に海底地すべりにより生成されたものと考えられている。また急流によりはぎとられたように一部がひっくり返った地層が見られたり、実に楽しい地質観察の道程であった。

（7月10日 浅海教官指導）

北 佐 久 巡 検

清 水 慶 子

私達1年生にとって初めての宿泊巡検は長野県北佐久地方、まだ強い日ざしの残っている9月7日だった。テーマは「北佐久地方の旧宿場町の変遷」で、井内先生指導の下、軽井沢・小諸・望月を訪ねた。

軽井沢駅前に集合後、駅前通りを歩いて行ったが、さすがは夏の軽井沢、まるで東京の街中を歩いているようだった。バスに乗って町役場へ向かう途中から雲行きがあやしくなり、役場に到着してから、夕立のような雨が降り始めた。その上ものすごい雷が鳴り、停電。山の天気の変わりやすさを改めて感じた。ヒアリングによって、軽井沢の

別荘がいかにも多く、そのための行政が大変であるかがわかった。

追分の旧宿場町は、中山道からはずれて国道が通っているので、江戸時代・明治時代に来てしまったのではないかと思われた。先生から、分去れと樹形の茶屋の説明を聞いて、近くに住んでいる荻原さんのお宅におじゃまし、中山道と北国街道の成立過程・追分宿の変遷についてお話していただいた。それから旧本陣や別荘を見ながら堀辰雄について聞き、浅間神社で荻原さんとお別れして私達は信濃追分駅へ。

しかし、予定の列車が大幅に遅れており、旅館

のバスに迎えに来てもらった。バスの中では、皆ぐったりして、いつものパワーはどこへ行ったのやら。眠って座席から落ちそうになった人もいた。

2日めは朝から雨になってしまい、傘をさしながら小諸市内を見学。市教育委員の永原秀山先生に案内していただいた。明治時代からの建物が点在し、急な坂の多い町である。この坂のために、小諸は都市計画もできず、町の発展は期待できないということだった。

望月へは、旧中山道の曲がりくねった小道をしばらく歩いてはいった。この道は、両側が野原や林・畑になっており、車も減多に通らず、閑静で江戸時代の中山道の姿を十分に残していた。望月で一番印象に残っているのは真山家。街道時代に旅館と問屋を兼ねた家で、中に入らせてもらった。真暗な下男部屋と一段高くなっている上段の間を見て、身分による差別のあまりの大きさに驚いた。真山家以外にも古い建物が多く、出桁造りの家・防火用のうだつなど、珍しいものがあった。

瑞 穂 巡 検

瑞穂巡検は私達一年生にとって最初の本格的な巡検であり、各自がそれなりの期待をもって武蔵村山市にやって来たのであった。今回は村山大島紬、狭山茶、東京近郊の花卉園芸、酪農、新田集落の五つをテーマとしたもので、内容が盛りだくさんだけにハードな巡検となった。そのうえ、紬の染色工場、製茶工場、牛小屋、温室と、暑い所をまわることが多く、ちょうど七月半ばの暑い日で、私達は早くも巡検の苦勞を知った。同時に、働く人々の苦勞も知ったのであった。

最初に行ったのは村山織物組合である。村山大島紬は、江戸中期以来村山地方で生産されている伝統工芸であり、板締めという特殊な染色法を特徴とする。組合で映画を見た後、工場を見学して実際の生産工程を視察した。非合理的ともいえる家内手工業による紬の生産は、たいへんな手間と技術を要するものである。現在組合では、後継者、

望月宿と芦田宿との間の宿である茂田井宿は、国道からはずれているため、道も非常に狭く、静かな雰囲気のある町である。並んでいる白い土塀や土蔵・杉玉がまぶしかった。若山牧水が愛したというこの地酒をいただいて、私達は酔い心地で東京に帰ってきた。

今回訪れた旧宿場のうち、現地も繁栄しているのは、軽井沢と小諸だけで、他はさびれてしまったと言っているくらいであった。この差は、やはり明治時代以降の「交通」によるものだろう。鉄道や国道の影響が、こんなに強いものであるとは、町の繁栄は「交通」にかかっている。新幹線で大騒ぎする沿線の人々の気持ちが変わるような気がした。

巡検に慣れていない私達なので、見落とした部分が多いと思うが、また、発見したものも多かった。夏休み最後の日の、すばらしい巡検だった。

(9月7日～8日 井内教官指導)

神 作 晶 子

従事者育成確保をはかっていると聞いた。次に訪れたのは瑞穂町の製茶工場である。埼玉との県境に位置する瑞穂町では狭山茶の生産が行われており、150haの茶園がある。巡検の日はちょうど二番茶の製茶が行われており、摘んだばかりの茶の葉が普段見なれたあの茶になる様子を見学した。

さて、瑞穂町は都市近郊農業が盛んである。昼食後は酪農と花卉園芸の視察に行った。瑞穂町の80戸の農家が1,700頭の乳牛を飼育しており、私達は農家のひとつを訪れ、いかに酪農が合理的に行われているかを聞いて驚いたのだった。ここでは酪農は東京都において最も高水準であるという。長岡温室団地の温室をまわって花卉園芸の様子を見たときは既に夕方、新田集落の視察を中止し、箱根ヶ崎駅で解散となった。

瑞穂町は合理的な近郊農業が発達している反面、伝統的な村山紬が今も生きつづいている町である。